

7/20 福地

政府・与党は、集団的自衛権の行使を可能にする安全保障関連法案の採決を強行した。旧満州（中国東北部）からの過酷な引き揚げ体験があり、特攻隊がテーマの作品「紫電改のタカ」を描いた漫画家ちばてつやさんが、安倍政権に対する批判や平和への思いを語った。

漫画家ちばてつやさん インタビュー



「絶対に戦争には関わらない」と世界中に約束した訳です。この平和憲法をいっしょに守ってきたんです。「日本は戦争ができない国」ということは世界中にかなり浸透しているし尊敬も集めている。

政府がきちんとした手順を踏まなかったのは、びっくりだし、ものすごく残念でなりません。安倍晋三首相が国民の十分な理解を得る前に、なぜ国民の命を預けるような大事なことを米国での演説で約束してきたのか。

満州で終戦を迎え、栄養失調で命からがら引き揚げてきた。「紫電改のタカ」を描いたのも「優秀な若者たちが、なぜ死ななければならなかったのか」という痛切な思いがあったからです。あれほど近隣に迷惑を掛け自分たちも苦しんで大変な思いをしたのに、戦後70年で日本人は、平和を水か空気みたいなに思うようになったんではないか。確かに、水や空気も普段、意識しない。でもなく、なれば生きていけない。だから、平和を追求するのも難しいかもしれないが、民意に沿うべきことを無理やりやるの

「普通の人材を海外に派遣するならば、困っている国へ行き、学校を建てたり、病院を建てたり、木を植えたり、井戸を掘ってあげたり、どう考えても、その方が世界中から感謝されるはずだ。日本が平和を勝ち取るまでにはつらい犠牲があった。空襲で多くの人が死に、広島と長崎に原爆が落とされ、若者たちが特攻で死に、それより何より、近隣諸国を巻き込んで罪もない人々をたくさん苦しめてしまった。私と家族の経験でいえば、

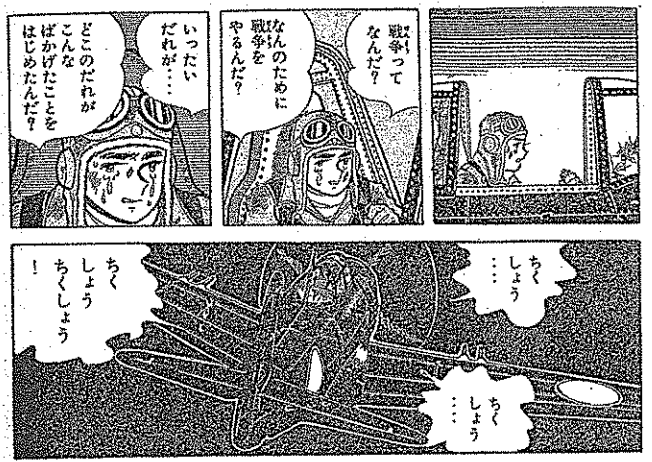
安保法案 手順踏まず残念

「当たり前」と思わず、もっと平和をありがたいと感じてほしいと思います。日本には、世界遺産にいいほど素晴らしい憲法がある。日本はこれによって「も

「普通の国」ならぬ決意を

も、また難しいでしょう。同じ難しいなら、たとえ心ない人から「デクノボー」と呼ばれても、多くから感謝される道を選ぶ方が私はいいと思

ちば・てつや 39年東京都生まれ。幼少時代、旧満州（中国東北部）で終戦を迎え、家族で過酷な引き揚げを経験した。代表作に「紫電改のタカ」（63年）、「あしたのジョー」（68年）など。05年から文筆芸術大学教授。日本漫画家協会理事長。



太平洋戦争の特攻隊をテーマにした「紫電改のタカ」の一場面 (©ちばてつや)